太宰治全集

2

筑摩書房

太宰治全集第二卷

昭和四十二年五月五日初版第一刷発行
昭和四十三年十二月十日初版第六刷発行

著者　太宰治

発行者　竹之内静雄

発行所　株式會社　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一－九一
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替　東京　四一一二三

印刷・三晃印刷
製本・鈴木製本

CS 70002

第二卷　目次

ダス・ゲマイネ　七
雌に就いて　三七
創生記　四六
喝采　六三
二十世紀旗手　七三
HUMAN LOST　九三
燈籠　一一九
滿願　一三七
姥捨　一三〇
I can speak　一五〇
富嶽百景　一五三
黄金風景　一七四

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

女生徒　一七九
懶惰の歌留多　二一七
葉櫻と魔笛　二三六

愛と美について

秋風記　二四七
新樹の言葉　二六四
花燭　二八五
愛と美について　三一〇
火の鳥　三三七

後記　三八一

太宰治全集

第二卷

ダス・ゲマイネ

一 幻燈

當時、私には一日一日が晩年であつた。

戀をしたのだ。そんなことは、全くはじめてであつた。それより以前には、私の左の横顔だけを見せつけ、私のをとこを賣らうとあせり、相手が一分間でもためらつたが最後、たちまち私はきりきり舞ひをはじめて、疾風のごとく逃げ失せる。けれども私は、そのころすべてにだらしなくなつてゐて、ほとんど私の身にくつついてしまつたかのやうにも思はれてゐたその賢明な、怪我の少い身構への法をさへ持ち堪へることができず、謂はば手放しで、節度のない戀をした。好きなのだから仕様がないといふ嗄れた呟きが、私の思想の全部であつた。二十五歳。私はいま生れた。生きてゐる。生き、切る。私はほんたうだ。好きなのだから仕様がない。しかしながら私は、はじめから歡迎されなかつたやうである。無理心中といふ古くさい概念を、そろそろとからだで了解しかけて來た矢先、私は手ひどくはねつけられ、さうしてそれつきりであつた。相手はどこかへ消えうせたのである。

友人たちは私を呼ぶのに佐野次郎左衞門、もしくは佐野次郎（さのじろ）といふ昔のひとの名でもつてした。「さのじろ。——でも、よかつた。そんな工合ひの名前のおかげで、おめえの恰好もどうやらついて來たぢやないか。ふられても恰好がつくなんてのは、てんからひとに甘つたれてゐる證據らしいが、——ま、落ちつく。」

馬場がさう言つたのを私は忘れない。そのくせ、私を佐野次郎なぞと呼びはじめたのは、たしかに馬場なのである。私は馬場と上野公園内の甘酒屋で知り合つた。清水寺のすぐちかくに赤い毛氈を敷いた縁臺を二つならべて置いてある小さな甘酒屋で知り合つた。

私が講義のあひまあひまに大學の裏門から公園へぶらぶら歩いて出ていつて、その甘酒屋にちよいちよい立ち寄つたわけは、その店に十七歳の、菊といふ小柄で利發さうな、眼のすずしい女の子がゐて、それの樣が私の戀の相手によくよく似てゐたからであつた。私の戀の相手といふのは逢ふのに少しばかり金のかかるたちの女であつたから、私は金のないときには、その甘酒屋の縁臺に腰をおろし、一杯の甘酒をゆるゆると啜り乍らその菊といふ女の子を私の戀の相手の代理として眺めて我慢してゐたものであつた。ことしの早春に、私はこの甘酒屋で異樣な男を見た。その日は土曜日で、朝からよく晴れてゐた。私はフランス抒情詩の講義を聞きをへて、眞晝頃、梅は咲いたか櫻はまだかいな。たつたいま教はつたばかりのフランスの抒情詩とは打つて變つたかかる無學な文句に、勝手なふしをつけて繰りかへし繰りかへし口ずさみながら、れいの甘酒屋を訪れたのである。そのときすでに、ひとりの先客があつた。私は、おどろいた。先客の恰好が、どうもなんだか奇態に見えたからである。ずゐぶん瘦せ細つてゐるやうであつたけれども身丈は尋常であつたし、着てゐる背廣服も黑サアジのふつうのものであつたが、そのうへに羽織つてゐる外套がだいいちに怪しかつた。なんといふ型のものであるか私には判らぬけれども、ひとめ見た印象で言へば、シルレル

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

の外套である。天鵞絨と紐釦がむやみに多く、色は美事な銀鼠であつて、話にならんほどにだぶだぶしてゐた。そのつぎには顔である。これをもひとめ見た印象で言はせてもらへば、シューベルトに化け損ねた狐である。不思議なくらゐに顯著なおでこと、鐵緣の小さな眼鏡とたいへんなちぢれ毛と、尖つた顎と、無精鬚。皮膚は、大仰な言ひかたをすれば、鶯の羽のやうな汚い靑さで、まつたく光澤がなかつた。その男が赤毛氈の緣臺のまんなかにあぐらをかいて坐つたまま大きい碾茶の茶碗でたいぎさうに甘酒をすすりながら、ああ、片手あげて私へおいでおいでをしたではないか。ながく躊躇をすればするほどこれはいよいよ薄氣味わるいことになりさうだな、とさう直覺したので、私は自分にもなんのことやら意味の分らぬ微笑を無理して浮べながら、その男の坐つてゐる緣臺の端に腰をおろした。

「けさ、とても固いするめを食つたものだから、」わざと押し潰してゐるやうな低いかすれた聲であつた。「右の奥齒がいたくてなりません。齒痛ほど閉口なものはないね。アスピリンをどつさり呑めば、けろつとなほるのだが。おや、あなたを呼んだのは僕だつたのですか？　しつれい。僕にはねえ、」私の顔をちらと見てから、口角に少し笑ひを含めて、「ひとの見さかひができねえんだ。めくら。——さうぢやない。僕は平凡なのだ。見せかけだけさ。僕のわるい癖でしてね。はじめて逢つたひとには、ちよつとかう、いつぷう變つてゐるやうに見せたくてたまらないのだ。自繩自縛といふ言葉がある。ひどく古くさい。いかん。病氣ですね。君は、文科ですか？　ことし卒業ですね？」

私は答へた。「いいえ。もう一年です。あの、いちど落第したものですから。」

「はあ、藝術家ですな。」にこりともせず、おちついて甘酒をひと口すすつた。「僕はそこの音樂學校にかれこれ八年ゐます。なかなか卒業できない。まだいちども試驗といふものに出席しないから

だ。ひとがひとの能力を試みるなんてことは、君、容易ならぬ無禮だからね。」

「さうです。」

「と言つてみただけのことさ。つまりは頭がわるいのだよ。僕はよくここにかうして坐りこみながら眼のまへをぞろぞろと歩いて通る人の流れを眺めてゐるのだが、はじめのうちは堪忍できなかつた。こんなにたくさんひとが居るのに、誰も僕を知つてゐない、僕に留意しない、さう思ふと、——いや、さうさかんに合槌うたなくたつてよい。はじめから君の氣持で言つてゐるのだ。けれどもいまの僕なら、そんなことぐらゐ平氣だ。かへつて快感だ。枕のしたを清水がさらさら流れてゐるやうで。あきらめぢやない。王侯のよろこびだよ。」ぐつと甘酒を呑みほしてから、だしぬけに碾茶の茶碗を私の方へのべてよこした。「この茶碗に書いてある文字、——白馬驕不行(ハクバオゴリテユカズ)。よせばいいのに。てれくさくてかなはん。君にゆづらう。僕が淺草の骨董屋から高い金を出して買つて來て、この店にあづけてあるのだ。とくべつに僕用の茶碗としてね。僕は君の顏が好きなんだ。瞳のいろが深い。あこがれてゐる眼だ。僕が死んだなら、君がこの茶碗を使ふのだ。僕はあしたあたり死ぬかも知れないからね。」

それからといふもの、私たちはその甘酒屋で實にしばしば落ち合つた。馬場はなかなかに死ななかつたのである。死なないばかりか、少し太つた。蒼黑い兩頰が桃の實のやうにむつつりふくれた。彼はそれを酒ぶとりであると言つて、かうからだが太つて來ると、いよいよ危いのだ、と小聲で附け加へた。私は日ましに彼と仲良くなつた。なぜ私は、こんな男から逃げ出さずに、かへつて親密になつていつたのか。馬場の天才を信じたからであらうか。昨年の晩秋、ヨオゼフ・シゲティといふブダペスト生れのヴァイオリンの名手が日本へやつて來て、日比谷の公會堂で三度ほど演奏會(こうけんかい)をひらいたが、三度が三度ともたいへんな不人氣であつた。孤高狷介のこの四十歳の天才は、憤

つてしまつて、東京朝日新聞へ一文を寄せ、日本人の耳は驢馬の耳だ、なんて悪罵したものであるが、日本の聽衆へのそんな罵言の後には、かならず、「ただしひとりの青年を除いて。」といふ一句が詩のルフランのやうに括弧でくくられて書かれてゐた。いつたい、ひとりの青年とは誰のことなんだらうとそのじぶん樂壇でひそひそ論議されたものださうであるが、それは、馬場であつた。馬場はヨオゼフ・シゲテイと逢つて話を交した。日比谷公會堂での三度目の辱かしめられた演奏會がをはつた夜、馬場は銀座のある名高いビヤホオルの奥隅の鉢の木の蔭に、シゲテイの赤い大きな禿頭を見つけた。馬場は躊躇せず、その報いられなかつた世界的な名手がことさらに平氣を裝うて薄笑ひしながらビイルを舐めてゐるテエブルのすぐ隣りのテエブルに、つかつか歩み寄つていつて坐つた。その夜、馬場とシゲテイとは共鳴をはじめて、銀座一丁目から八丁目までのめぼしいカフエを一軒一軒、たんねんに呑んでまはつた。勘定はヨオゼフ・シゲテイが拂つた。シゲテイは、酒を呑んでも行儀がよかつた。黒の蝶ネクタイを固くきちんと結んだままで、女給たちにはつひに一指も觸れなかつた。理智で切りきざんだ工合ひの藝でなければ面白くないのです。文學のはうではアンドレ・ジッドとトオマス・マンが好きです、と言つてから淋しさうに右手の親指の爪を嚙んだ。ジッドをチットと發音してゐた。夜のまつたく明けはなれたころ、二人は、帝國ホテルの前庭の睡蓮の池のほとりでお互ひに顔をそむけながら力の拔けた握手を交してそそくさと別れ、その日のうちにシゲテイは横濱からエムプレス・オブ・カナダ號に乘船してアメリカへ向けて旅立ち、その翌る日、東京朝日新聞にれいのルフラン附きの文章が揭載されたといふわけであつた。けれども私は、彼もさすがにてれくささうにして眼を激しくしばたたかせながら、さうして、おしまひにはほとんど不機嫌になつてしまつて語つて聞かせたこんなふうの手柄話を、あんまり信じる氣になれないのである。彼が異國人と夜のまつたく明けはなれるまで談じ合ふほど語學ができるかどうか、さうい

ふことからして怪しいもんだと私は思つてゐる。疑ひだすと果しがないけれども、いつたい、彼にはどのやうな音樂理論があるのか、ヴアイオリニストとしてどれくらゐの腕前があるのか、作曲家としてはどんなものか、そんなことさへ私には一切わかつて居らぬのだ。馬場はときたま、てかてか黑く光るヴアイオリンケエスを左腕にかかへて持つて歩いてゐることがあるけれども、ケエスの中にはつねに一物もはひつてゐないのである。彼の言葉に依れば、彼のケエスそれ自體が現代のサンボルだ、中はうそ寒くからつぽであるといふんだが、そんなときには私は、この男はいつたいヴアイオリンを一度でも手にしたことがあるのだらうかといふ變な疑ひをさへ抱くのである。そんな案配であるから、彼の天才を信じるも信じないも、彼の技倆を計るよすがさへない有樣で、私が彼にひきつけられたわけは、他にあるのにちがひない。私もまたヴアイオリンよりヴアイオリンケエスを氣にする組ゆゑ、馬場の精神や技倆より、彼の風姿や冗談に魅せられたのだといふやうな氣もする。彼は實にしばしば服裝をかへて、私のまへに現はれる。さまざまの背廣服のほかに、學生服を着たり、菜葉服を着たり、あるときには角帶に白足袋といふ恰好で私を狼狽させ赤面させた。彼の平然と呟くところに依れば、彼がこのやうにしばしば服裝をかへるわけは、自分についてどんな印象をもひとに與へたくない心からなんださうである。言ひ忘れてゐたが、馬場の生家は、東京市外の三鷹村下連雀にあり、彼はそこから市内へ毎日かかさず出て來て遊んでゐるのであつて、親爺は地主か何かで、かなりの金持ちらしく、そんな金持ちであるからこそ、樣々に服裝をかへたりなんかしてみることもできるわけで、これも謂はば地主の倅の贅澤の一種類にすぎないのだし、――さう考へてみれば、べつだん私は彼の風采のゆゑにひきつけられてゐるのでもないやうだぞ。金錢のせゐであらうか。頗る言ひにくい話であるが、彼とふたりで遊び歩いてゐると勘定はすべて彼が拂ふ。私を押しのけてまで支拂ふのである。友情と金錢とのあひだには、このうへなく微妙な相互

作用がたえずはたらいてゐるものらしく、彼の豐潤の狀態が私にとつていくぶん魅力になつてゐたことも爭はれない。これは、ひよつとしたら、馬場と私との交際は、はじめつから旦那と家來の關係にすぎず、徹頭徹尾、私がへえへえ牛耳られてゐたといふ話に終るだけのことのやうな氣もする。

ああ、どうやらこれは語るに落ちたやうだ。つまりそのころの私は、さきにも鳥渡言つて置いたやうに金魚の糞のやうな無意志の生活をしてゐたのであつて、金魚が泳げば私もふらふらついて行くといふやうな、そんなはかない狀態で馬場とのつき合ひをもつづけてゐたにちがひないのである。ところが、八十八夜。——妙なことには、馬場はなかなか曆に敏感らしく、けふは、かのえさる、佛滅だと言つてしよげかへつてゐるかと思ふと、けふは端午だ、やみまつり、などと私にはよく意味のわからぬやうなことまでぶつぶつ呟いてゐたりする有樣で、その日も、私が上野公園のれいの甘酒屋で、はらみ猫、葉櫻、花吹雪、毛蟲、そんな風物のかもし出す晩春のぬくぬくした爛熟の雰圍氣をからだぢゆうに感じながら、ひとりしてビイルを呑んでゐたのであるが、ふと氣がついてみたら、馬場がみどりいろの派手な背廣服を着ていつの間にか私のうしろのはうに坐つてゐたのである。れいの低い聲で、「けふは八十八夜。」さうひとこと呟いたかと思ふともう、てれくさくてかなはんとでもいふやうにむつくり立ちあがつて兩肩をぶるつと大きくゆすつた。八十八夜を記念しようといふ、なんの意味もない決心を笑ひながら固めて、二人、淺草へ呑みに出かけることになつたのであるが、その夜、私はいつそく飛びに馬場へ離れがたない親狎の念を抱くにいたつた。淺草の酒の店を五六軒。馬場はドクタア・プラアゲと日本の樂壇との喧嘩を嚙んで吐きだすやうにしながらながながと語り、プラアゲは偉い男さ、なぜつて、とまた獨りごとのやうにしてその理由を呟いてゐるうちに、私は私の女と逢ひたくて、居ても立つてもゐられなくなつた。私は馬場を誘つた。幻燈を見に行かうと囁いたのだ。馬場は幻燈を知らなかつた。よし、よし。けふだけは僕が先

輩です。八十八夜だから連れていつてあげませう。私はそんなてれかくしの冗談を言ひながら、プラアゲ、プラアゲ、となほも低く呟きつづけてゐる馬場を無理、矢理、自動車に押しこんだ。急げ！　ああ、いつもながらこの大川を越す瞬間のときめき。幻燈のまち。そのまちには、よく似た路地が蜘蛛の巣のやうに四通八達してゐて、路地の兩側の家々の、一尺に二尺くらゐの小窓小窓でわかい女の顏が花やかに笑つてゐるのであつて、このまちへ一歩踏みこむと肩の重みがすつと拔け、ひとはおのれの一切の姿勢を忘却し、逃げ了せた罪人のやうに美しく落ちつきはらつて一夜をすごす。馬場にはこのまちが初めてのやうであつたが、べつだん驚きもせずゆつたりした歩調で私と少しはなれて歩きながら、兩側の小窓小窓の女の顏をひとつひとつ熟察してゐた。路地へはひり路地を拔け路地を曲り路地へ行きついてから私は立ちどまり馬場の横腹をそつと小突いて、僕はこの女のひとを好きなのです、ええ、よつぽどまへから、と囁いた。私の戀の相手はまばたきもせず小さい下唇だけをきゆつと左へうごかして見せた。馬場も立ちどまり、兩腕をだらりとさげたまま首を前へ突きだして、私の女をつくづくと凝視しはじめたのである。やがて、振りかへりざま、叫ぶやうにして言つた。

「やあ、似てゐる。似てゐる。」

はつとはじめて氣づいた。

「いいえ、菊ちやんにはかなひません。」私は固くなつて、へんな應へかたをした。ひどくりきんでゐたのである。馬場はかるく狼狽の樣子で、

「くらべたりするもんぢやないよ。」と言つて笑つたが、すぐにけはしく眉をひそめ、「いや、ものごとはなんでも比較してはいけないんだ。比較根性の愚劣。」と自分へ說き聞かせるやうにゆつくり呟きながら、ぶらぶら歩きだした。あくる朝、私たちはかへりの自動車のなかで、默つてゐた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo